

第5話

ARCSモデルとブレンド型eラーニング
動機づけ設計モデルの応用

- 誕生から25年、ジョン・ケラーのARCSモデルは教育の「魅力」(appeal; engagement)を設計する不滅のIDモデルです
- 動機づけに関する心理学諸理論をまとめて4要素に分解
 - Attention「おもしろそうだ」
 - Relevance「やりがいがありそうだ」
 - Confidence「やればできそうだ」
 - Satisfaction「やってよかった」

下位分類もあります
- 動機づけ設計モデルの3要素を備え、多方面で応用実績
- 動機づけ設計の3ステップは学習者分析、動機づけ方略の選択的利用、評価と改善
- MotivationとVolition: ARCSモデルの進化形？
 - ICoME2004@関西大学招待講演で耳にした動き・・・

Motivation と Volition

• volition【名】

- 意志(力・作用)、意欲、決意、決断(力)、意志選択行為、選択
- **volition level** 意欲水準
- exercise **volition** 意志を働かせる
- own **volition** 《one's ~》自分の自由意志
by one's own **volition** 自由意志で
- of one's own **volition** 自分の(自由)意志で、自発的に、自主的に、自ら進んで[選んで]

• motivation【名】

- 動機、動機付け、自発性、やる気、刺激、意欲
- **motivation behind decision** 決定の裏[背後]にある動機
- **motivation behind someone's behavior** (人)の行動の背後にある動機
- **motivation for learning** 学習意欲
- **motivation for nuclear proliferation** 核拡散の動機
- **motivation for someone's work** 仕事の原因力

出典: 英辞郎 on the Web



～学習動機を捉えるARCSモデル～

ARCSは
便利ですょ

私がつくり
ました！

ARCSmodel
ARCSmodel

John M. Keller



ARCSモデルの理論的基盤

注意

関連性

自信

満足感

心理学理論等を実践者
向けにまとめた

欲求の階層構造
(マズロー)

統制の位置
(ロッター)

達成動機
(アトキンソン)

効力感
(バンデューラ)

強化価値
(ロッター)

期待×価値理論

自己決定感
(ドシャーム)

内発的vs外発的動機づけ

好奇心喚起
(バーライン)

獲得された無力感
(セリグマン)

不安感(ミラー)

原因帰属(ワイナー)



動機づけ設計の手順

学習者検証
の原理

形成的評価と改善
ARCSmodel

不必要な意
欲向上方略
は動機づけ
を阻害する

動機づけ方略の選択
ARCSmodel

ARCSの
何が問題か
何が目標か

学習者特性の分析
ARCSmodel

魅力を
高める
道のり

ARCSモデルの構成要素

動機づけ
設計プロセス

システムの活用方法
ARCSmodel

学習意欲を
高める作戦
のヒント集

動機づけ方略
ARCSmodel

ARCSの
4分類と
3つずつの
下位分類

設計の枠組み
ARCSmodel



魅力を
高める
道具



ARCS4要因の下位分類

(Keller & Suzuki, 1988)

注意

- A-1: 知覚的喚起 (Perceptual Arousal)
- A-2: 探求心の喚起 (Inquiry Arousal)
- A-3: 変化性 (Variability)

関連性

- R-1: 親しみやすさ (Familiarity)
- R-2: 目的指向性 (Goal Orientation)
- R-3: 動機との一致 (Motive Matching)

自信

- C-1: 学習要求 (Learning Requirement)
- C-2: 成功の機会 (Success Opportunities)
- C-3: コントロールの個人化 (Personal Control)

満足感

- S-1: 自然な結果 (Natural Consequences)
- S-2: 肯定的な結果 (Positive Consequences)
- S-3: 公平さ (Equity)



ARCS4要因の下位分類

(Keller & Suzuki, 1988)

注意

- A-1: 知覚的喚起 (Perceptual Arousal)
- A-2: 探求心の喚起 (Inquiry Arousal)
- A-3: 変化性 (Variability)

関連性

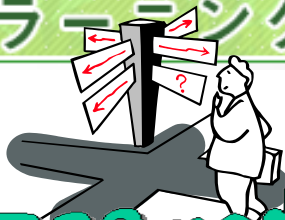
- R-1: 親しみやすさ (Familiarity)
- R-2: 目的指向性 (Goal Orientation)
- R-3: 動機との一致 (Motive Matching)

自信

- C-1: 学習要求 (Learning Requirement)
- C-2: 成功の機会 (Success Opportunities)
- C-3: コントロールの個人化 (Personal Control)

満足感

- S-1: 自然な結果 (Natural Consequences)
- S-2: 肯定的な結果 (Positive Consequences)
- S-3: 公平さ (Equity)



動機づけ方略集がこれまでに 提案された領域

- 陸軍における訓練計画立案 (Keller & Dodge, 1982)
 - 教員養成プログラムでの応用 (Keller, 1984)
 - 社内教育プログラムの立案 (Keller, 1987a)
- 理科の学習教材の改訂案を提出 (Keller & Kopp, 1987)
 - CAI教材の設計・開発 (Keller & Suzuki, 1988)
- マルチメディアの相互作用性分析 (Keller & Keller, 1991)
 - 教授メッセージの設計原理 (Keller & Burkman, 1993)
 - 大学生の学習意欲自己開発 (鈴木、1993a)
 - 放送番組利用での学習意欲向上 (鈴木、1993b)
- マルチメディア英語教材の分析 (鈴木・坂谷内・赤堀、1993)
 - マルチメディア教材のネットワーク化 (鈴木、1994b)